



超絶技巧を超えて 2022 sat. sun.  
**吉村芳生展 4/16-5/29**

会期中無休  
**北九州市立美術館分館**  
 KITAKYUSHU MUNICIPAL MUSEUM OF ART, RIVERWALK GALLERY  
 北九州市小倉北区室町一丁目1-1 リバーウォーク北九州5F  
 093-562-3215 <https://www.kmma.jp>

**Yoshimura Yoshio** Beyond  
 Hyper-realism

開館時間 10時～18時 ※入館は17時30分まで 主催=吉村芳生展実行委員会(毎日新聞社、北九州市立美術館) 後援=九州旅客鉄道株式会社、西日本鉄道株式会社、北九州モノレール、株式会社スターフライヤー、

北九州市、北九州市教育委員会 協賛=株式会社ゼンリン、住友生命保険相互会社北九州支社 特別協力=毎日新聞西部アシスト 企画協力=株式会社アートワン

〈無数の輝く生命に捧ぐ〉(部分)2011-13、色鉛筆/紙

# これ鉛筆画です。



〈未知なる世界からの視点〉  
2010. 色鉛筆 / 紙

約10mあるこの作品も  
全て色鉛筆で  
描かれています

## 百花繚乱

Myriad of Blossoming Flowers

1990年頃から吉村は色鉛筆で描いた花の絵を制作するようになります。題材となった花々は、85年に広島から移住した故郷山口県・徳地の休耕地に咲くコスモスやケシでした。



スランプの  
吉村を救った  
徳地の  
コスモス



右:〈モッコウバラ〉2000. 色鉛筆 / 紙、みぞえ画廊  
中:〈ケシ〉2005. 色鉛筆 / 紙  
左:〈コスモス〉2000-07. 色鉛筆・墨 / 紙

## 超絶技巧を超えて 吉村芳生展

2022 sat. [全期中無休] sun.  
4/16 - 5/29

超絶技巧? そんな単純な言葉で説明することはできません。毎日描き続けた膨大な数の自画像、1文字1文字をすべて書き写した新聞紙、10メートルの色鉛筆画—。吉村芳生が生み出した作品は、どれも超絶リアルでありながら、見る者の度肝を抜く凄みを感じさせます。1950年、山口県に生まれた吉村芳生が一躍注目を浴びたのは2007年のことでした。この年に開かれた「六本木クロッシング2007」展(森美術館)に出品された作品が大きな話題となり、吉村芳生は57歳にして突如、現代アート・シーンの寵児となったのです。本展は吉村芳生の回顧展として、初期のモノトーンによる版画やドローイング、後期の色鮮やかな花の作品、生涯を通じて描き続けた自画像など、吉村芳生の全貌を伝えます。2013年に惜しまれつつ早逝した吉村芳生の、ただ上手いだけの絵ではない、描くこと、生きることの意味を問いただす真摯な作品の数々を、ぜひその眼で目撃してください。

## 北九州市立美術館分館

KITAKYUSHU MUNICIPAL MUSEUM OF ART, RIVERWALK GALLERY

北九州市小倉北区室町一丁目1番1号 リバーウォーク北九州5F  
TEL:093-562-3215 <https://www.kmma.jp>



アクセス  
●JR=小倉駅から徒歩10分/西小倉駅から徒歩5分  
●西鉄バス=「小倉駅バスセンター」バス停(4番、7番のりば)より魚町方面行きバスに乗車し、「室町・リバーウォーク」で下車/「西鉄天神高速バスターミナル」から高速バス「いとうづ号」(小倉方面行き)に乗車し、「西小倉駅前」で下車  
●車(北九州都市高速道路)=[小倉駅北]ランプより5分、「大手町」ランプより5分  
※観覧料では駐車場利用料の割引はございません

会場内では、新型コロナウイルス感染症対策を実施しておりますので、ご協力をお願いいたします

入場料(税込)	当日
一般	1,300円 (1,100円)
高大生	800円 (600円)
小中生	600円 (400円)

\* ( )内は前売りおよび20名以上の団体料金。なお障害者手帳を提示の方は無料。北九州市在住の65歳以上の方は2割減免(公的機関発行の証明書等の提示が必要)。  
\* 前売り券は、ローソンチケット(ローソン、ミニストップ)、チケットぴあ(チケットぴあ店舗、セブンイレブン)、セブンチケット(セブンイレブン)、e+イープラス(ファミリーマート)、小倉井筒屋、北九州モノレール主要駅で販売。  
\* ローソンチケット、チケットぴあ、セブンチケット、e+イープラスについては、展覧会開催中は当日料金での販売となります。



ジーンズの織り目まで丁寧に描かれたドローイング作品。この超絶技巧を支える秘密は「マス目」にあり!

よく見ると、新聞記事も1文字1文字全て描かれているんです!

close-up

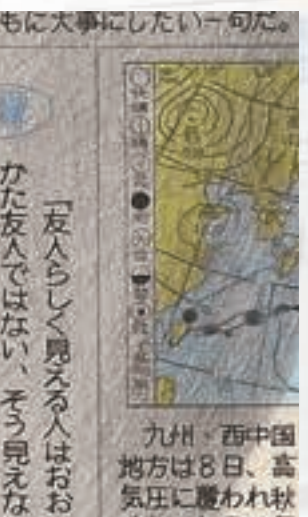
## ありふれた風景

Everyday-life Scenes

版画作品や、鉛筆でのドローイングが中心の初期の作品。制作の特徴として、題材を撮った写真にマス目を引き、それをさらに拡大して—マスごとに模写していくという機械的な方法が挙げられます。



上:〈ジーンズ〉1983. 鉛筆 / 紙  
右:〈SCENE No.40〉1983. インク / フィルム  
左:〈A PARKING SCENE No.26(A)〉1979. シルクスクリーン / 紙



〈新聞と自画像 2008.10.8 毎日新聞〉  
2008. 鉛筆・色鉛筆・水性ペン・墨・水彩 / 紙

## 自画像の森

A Forest of Self-portraits

生涯で2000点を超える自画像を描いた吉村。新聞の一面に大きく自画像が描かれたシリーズでは、すべて同じ画家の顔であるにも関わらず、記事内容を反映した多様な表情について引き込まれてまいります。